ひむか メディア アクション
HIMUKA MEDIA ACTION

ひむかかるた通信 第10号

附属が初優勝

個人は水田さんが頂点

第11回大会に110人出場

2月17日に宮崎公立大学体育館で第11回ひむかかるた競技大会が開催された。今大会は宮崎市内の15小学校から団体に29チーム、個人に24人がエントリー。小学生や中学生による審判や読み手、先生たちによる試合進行など新たな取り組みがあった。それぞれの思いを抱いて大会に挑んだ子どもたちの様子を紹介する。

強烈なイメージ残した附属小（団体）

読み手が「ふ」（〝フェニックス、高く大きく、たくましく〟）の文言を読みあげ、両チームが手を振りかざした瞬間、第11回ひむかかるた団体戦決勝の勝敗は決した。形勢不利とみた潮見小学校Bチーム（以下潮見Bチーム）は一発逆転を狙い、役札の「ふ」をなんとしてでも取りにいこうとしたのだが、その一縷の望みを宮崎大学教育学部附属小学校Bチーム（以下附属Bチーム）が凄まじい集中力と気迫で阻んだのだ。結果、附属Bチームが栄冠を手にした。取り札は26対20。これは潮見Bチームが「ふ」を取っていたら役札ポイントが7枚分加わり、結果が逆転していた枚数だ。

予選リーグを圧倒的な力で勝ち進んだ附属Bチームは、「メンバーそれぞれが手前にある自陣と敵陣の4枚×4列・15～16枚を担当する」という戦略を全ての試合で徹底させていた。確実に自陣の札を死守、その一方で敵陣の中で自分が狙いを定めたもの、得意とする絵札を〝もぎ取る〟というのがそれだ。敵陣に向かう場面では、センターの新谷心海さんがもの凄い迫力で札を畳みの遙か外へ吹き飛ばす【払い手】が何度も見られ、相手チームの戦意を喪失させていた。札を取るだけでなく、相手に〝このチームには勝てないかも〟という恐怖心すら与えていたのだ。その戦いぶりは、まさに王者を名乗るに相応しいものだった。

（宮崎公立大学4年・有吉千佳）

江平の絶対女王 本領を発揮（個人）

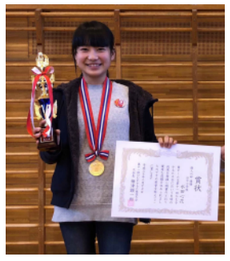
今年度はどの選手もレベルが高く、個人戦のコートでは白熱した戦いが繰り広げられた。そんな戦いの中、優勝に輝いたのは江平小学校の水田心花さん（6年）だ。

水田さんは、今年度からクラブ活動でひむかかるたを始め、活動の時間を通してかるたを取るスピードを磨いてきた。かるたの暗記力とかるたを取るスピードの速さから、現在では同クラブの友だちから「絶対女王」と呼ばれるほどのテクニシャンだ。

決勝の対戦相手は前回大会5位の強敵・嶋戸結華さん（小戸小4年）。予想通り、試合は札を取ればすぐさま取り返される激しい攻防が続いたが、次第に水田さんが優勢に。終盤になると優勝を確信した水田さん。応援していた同じクラブの友だちの応援に笑顔で応えるなど余裕を見せるほどだった。

試合後「優勝して嬉しかった」と掛け値なしに喜びを語った水田さん。応援に駆けつけていた同じクラブの友だちたちが水田さんと一緒に優勝を喜んでいたのが印象的だった。

（宮崎公立大学3年・山本彩未）



第11回大会結果

【団体戦】
・優勝＝宮崎大附属B：新谷心海（6）後藤朋季（6）菅谷奈央（6）
・準優勝＝潮見B：山﨑日菜乃（6）草野七海（4）柳瀬莉蕗
・第3位＝西池B：金子未侑（6）小林澪奈（6）工藤伊織（5）
・第4位＝大塚C：弓削紗彩（5）川畑百花（5）福丸愛佳（5）

【個人戦】
・優勝＝水田心花（江平6）
・準優勝＝嶋戸結華（小戸4）
・第3位＝小野涼椛（大塚6）
・第4位＝川越夕有里（西池5）

【敢闘賞】
・豊福美咲（宮崎港6）

第11回大会を終えて

今回の大会は2月17日、平昌オリンピックで羽生選手が金メダルを取った日に行われました。オリンピックでは、選手たちの戦い方の美しさ、国境を越えた友情の素晴らしさが話題となりましたが、今回のひむかかるた大会でも、相手に敬意を払い、思いを寄せあうシーンがあちこちで見られました。

本来、競争し合うことで盛り上がるゲームでは、対戦する相手は「敵」になります。しかし、共にゲームを盛り上げ、自分を高めようとする「仲間」でもあるわけです。まず自分の志に誇りを持ち、次にお互いの思いに敬意を払うことで、選手同士は強い絆を育んでいく。こうして友情は国境を越えるのです。

そして、これが一番大切なことですが、ひむかかるたの選手たちは、友情だけでなく郷土愛も寄り添わせているように僕も見えます。46の読み札という共通言語を持つ仲間たちが、それぞれの宮崎への思いを寄せあっているのです。

選手たちが将来大人になったとき、そのような思いの輪は、もっと大きく広がってゆくでしょう。自分たちの大切なふるさとへの思いと同じように、他の地域の人たちも故郷を大切に思っていることに気づくでしょう。そしてお互いのそんな思いに敬意を払い寄り添う。郷土愛はまさに地域を超えるのです。

ひむかかるた協会
会長　梅津顕一郎

かるたがつくる宮崎の未来

11月25日（土）、宮崎公立大学交流センター多目的ホールにて、宮崎市学術研究振興助成事業シンポジウム「新しい郷土教育が開く宮崎の未来～ひむかかるた実践から見えてきたもの～」が開催されました。地域と国の関係が変わりつつある中、これからの地域に求められるものは何かというテーマの下、本協会理事を務める佐多修宮崎市立大塚小学校教諭、山口孝治宮崎市立高岡小学校教諭、緒方理一郎宮崎市立宮崎南小学校教諭が登壇し、ひむかかるたが新しい時代を開く可能性について教育実践例を手掛かりに議論を深めました。（報告・梅津顕一郎会長）

3教諭が教育効果の可能性示す

このシンポジウムは、宮崎市学術研究振興助成事業の助成を受けている宮崎公立大学のプロジェクトチーム「宮崎における21世紀型地域アイデンティティの構築～観光・歴史・郷土教育を中心に～」（メンバー：梅津顕一郎、倉真一、森津千尋）の研究成果報告のひとつとして宮崎公立大学が主催したものであり、昨年度に引き続いての開催となりました。

今回のテーマは、端的に言えば「教育がこれからの、未来に向けた地域イメージとアイデンティティをどう作るか」です。私はこれまでひむかかるたを社会科教育や総合学習の時間、その他課外活動に使っている現場の先生方をたくさん見てきたので、このテーマをいただいた時、是非ひむかかるたを題材として都営上げたいと考え、共同研究者の2人の賛同を得て、取り組むことにしました。

シンポジウムは私の基調講演からはじまり、教育現場でかるたに取り組んでいる三先生の実践的な報告、そして共同研究者である公立大の二先生も交えたディスカッションという3部構成で行いました。

基調講演では、まず昨年までの共同研究の成果を受け、21世紀型地域アイデンティティの構築に必要な基本的な考え方を示しました。具体的には、国と地域の関係が大きく変わりつつある現代では、地域イメージの捉え方も郷土愛のあり方も、まずは地域で生活している人の目線を出発点にすべきである事、ただし人、モノ、情報の目まぐるしい流れが世界規模で起きている現代では、地域の人々の意識が内向きな「独りよがり」なものになってはいけない事、最後に常に不安定な要素を孕むこれからの時代、地域のイメージは一貫した、いつの時代にも変わらぬものではなく、しっかりとした「定点」を持ちながらも柔軟に変化したり書き換えられたりする要素を常に持ったものであるべきである事などを指摘しました。

そして、このような「難題」に応える、新しい郷土愛を作り得るのが郷土かるたであり、これこそが21世紀型地域アイデンティティの構築に有効なツールであるとの持論を披露しました。その後、みやざきの郷土かるたである「ひむかかるた」が公立大で作られた経緯や、その後の教育界での発展・展開、とりわけ教育現場における活用状況の簡単な紹介。さらに昭和22年に作成された「上毛かるた」（群馬県）と、21世紀に入ってから作られたひむかかるた（平成19年完成）の読み札の内容を比較しながら、「ひむかかるた」ならではの視点の新しさについて言及しました。

次にパネルディスカッションでは、各小学校でひむかかるたを使った教育に取り組まれている3名の先生方から、それぞれの実践活動について報告をいただきました。

まず、大塚小学校の佐多教諭からは、クラスでのかるたの遊びの要素を巧みに使った社会科での取り組みや、夏休みの宿題であるフィールドワーク「ひむかかるたの旅」、さらには「ひむかかるた弁当」など、手を変え品を変え子供たちが宮崎と地域を好きになるための取り組みが語られました。

また、現在高岡小に勤務されている山口教諭からは、前任の小戸小時代の取り組みとして、「小戸かるた」という学区かるたを作成した際の具体的な手順や苦労、完成の喜びなどが語られました。そして、地域の人々とうまく協力関係を作ることの大切さと、人々を様々な形でつなぐかるたの力への期待が述べられました。

最後に宮崎南小の緒方教諭からは、『ひむかかるた』で、みやざきの次世代をつくる」と題し、前任の小戸小時代に取り組んだ、子供たちによる校内大会を中心に報告がありました。大会を子供たち自身の手でマネージメントすることで、お互いを思いやり、協力し合う力を育てるという意味で、この取り組みはキャリア教育でもあることを先生は主張されました。

休憩をはさみ、シンポジウム後半では、森津准教授をコメンテーターとしてディスカッションが行われ、「ひむかかるた」の現状や今後の課題等について、議論が交わされました。

その中で、ひむかかるたが平成19年という、比較的新しい時代に生まれたからこそ、自由に活用され、またその自由度の高さゆえに地域アイデンティティや地域イメージを自由に膨らませることができることが確認されました。さらには新しい「ひむかかるた」の開発可能性やご当地かるた同士の対抗戦実施等、当日は様々なアイディアが飛び交いました。

終盤には、かつてかるたを小学校で習った経験のある高校生も参戦。登壇者たちと熱い意見交換が行われる等、シンポジウムの終了予定時間を超過するほど、活発な意見交換が行われました。